様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６１４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１０９２２

研究課題名（和文）海洋文化復興運動が地域社会と地域経済に及ぼす影響

研究課題名（英文）Impact of the Marine Cultural Revival Movement on Local Communities and Local Economies

研究代表者
千足　耕一（CHIASHI, Koichi）

東京海洋大学・学術研究院・教授

研究者番号：７０２８９８１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：帆掛けサバニに関する史的資料を収集するとともに、帆かけサバニ復興運動に関わる組織、サバニ研究者や船大工、サバニ愛好者などの重要な人物を対象として聞き取り調査を実施し、得られた資料や逐語データからサバニ復興運動の契機や原動力について明らかにした。帆掛けサバニへの取り組みが地域社会に与えた影響を抽出するために、サバニレース参加者を対象とした調査を実施し、サバニ帆漕レースの開催と継続を契機とした帆掛けサバニへの取り組み事例から、取り組む者や地域への影響について考察した。また、サバニ帆漕レースをシリアス・レジャーと位置づけ、レース参加経験者を対象とした質問紙調査を実施し、参加者自身への影響を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
帆掛けサバニに関する史的資料の収集と、帆かけサバニ復興運動に関わる組織、サバニ研究者や船大工、サバニ愛好者などの重要な人物を対象とした聞き取り調査から、海洋文化復興運動の原動力や契機を明らかにすることができた。
サバニ帆漕レースの開催と継続を契機とした帆掛けサバニへの取り組み事例から、伝統的な海洋文化財としての帆掛けサバニを、地域の自然や歴史を背景とした地域づくりに有用な資源として位置づけることが可能であり、取り組む人々やコミュニティに様々な影響を及ぼしていることを示すことができた。また、サバニ帆漕レースをシリアス・レジャーと位置づけ、レース参加者の特徴を分析することができた。

研究成果の概要（英文）：We collected historical materials on Hokake Sabani, and we conducted interviews with organizations involved in the Hokake Sabani revival movement, Sabani researchers, boat builders, Sabani lovers, and other important figures. From the obtained materials and verbatim data, the impetus and driving force of the Sabani revival movement were clarified.
Next, we conducted a survey of Sabani race participants to extract the impact of the sailing Sabani initiative on the local community. From the case studies of the Sabani initiative of Hokake Sabani triggered by the holding and continuation of the Sabani Sailing & Paddling Race, the impact on the people who are working on it and the community was discussed.
In addition, the Sabani Sailing & Paddling Race was positioned as a serious leisure activity, and a questionnaire survey was conducted for those who had participated in the race, and the impact on the participants themselves was verified.

研究分野：体育科学

キーワード：海洋文化　文化復興運動　地域社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は海洋スポーツに関連する舟艇の文化復興に焦点を当て、地域経済、地域社会との関連について論じようとする学際的研究として位置づけられる。1970 年代から南太平洋の島々で始まった帆走カヌー（Voyaging Canoe）による伝統文化復興運動が映像や書籍で報告されるような、カヌールネッサンスと呼ばれる海外の事例がある。ホクレア号と名付けられた帆走カヌーが星や波を利用して行う伝統航海術を復興してポリネシアにおける航海を成功させたことによって、ハワイの人々がアイデンティティを取り戻したと報告され、研究の対象ともなっている。本研究において海洋文化復興の対象とする帆掛けサバニとは、沖縄地方で使用されてきた民族的な小舟のことであり、戦前より、漁撈や移動に用いられてきたものである。これまでのサバニに関する研究は、歴史学的研究、造船学的観点からの研究、船体に関する工学的研究、民俗史的研究などがあり、板井（2014）は、工学的研究と歴史や民族に関する研究との連携が不足していることを指摘している。本研究は、帆掛けサバニ復興運動の社会・経済的な意義を問う人文社会学的な研究であり、地域振興をテーマとする。少子高齢化が進み、地域活力が衰退する中、スポーツによる地域振興は急務の課題であるとも述べられている。1990 年代以降、日本においても地域行政の施策でスポーツ観光が推進されるようになってきたことが報告され、その多くは合宿誘致やスポーツイベントの開催であるとも述べられている。関連する研究には、スポーツと街づくりに関する研究、スポーツの地域活性化に関する効果を論じた研究、地域開発の可能性について論じた研究、地域イノベーションに成功要因に関する研究などがあげられる。これらの中で、文化復興をテーマとした研究は非常に少なく、サバニレースと地域振興に関する文献は、座間味村サバニレース実行委員会による報告（2013 年）のみである。本研究では、既往研究で不足していると考えられる伝統文化復興運動の経緯、成功要因、波及効果等について地域経済や地域社会に与えた影響を明らかにすることで、どのような背景を持つ文化資源が、どのように地域活性化に貢献したかを明示することが可能となるものと考えられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、海洋文化復興運動が地域社会と地域経済に与えた影響について追究することにより、海洋文化復興運動の意義や波及効果を明らかにすることであった。

３．研究の方法

（研究 1）

帆掛けサバニに関する史的資料を収集するとともに、帆かけサバニ復興運動に関わる組織（帆かけサバニ保存会，サバニレース実行委員会等）およびサバニ研究者や船大工、サバニ愛好者などの重要な人物を対象として聞き取り調査を実施し、得られた資料や逐語データからサバニ復興運動の契機や原動力について考察した。

（研究 2）

帆掛けサバニへの取り組みが地域社会へ与えた影響を抽出するために、サバニレース参加者を対象とした調査を実施した。インターネット上に Google Form を用いた web 調査票を設置する形でアンケート調査を行った。本研究では、「サバニ帆漕レースやサバニへの取り組みが、参加者自身やチーム・地域社会に与えた影響」について明らかにすることを目的とすることから、設問「サバニ帆漕レースやサバニへの取り組みが、皆さん自身やチーム・地域社会に与えた影響について、自由に記述してください」に対する回答（テクストデータ）を分析対象とした。

（研究 3）

座間味島～那覇間（約 36㎞）の慶良間海峡を伝統木造船にて横断するサバニ帆漕レースをシリアス・レジャーと位置づけ、サバニ帆漕レースに参加経験のある者を対象とした質問紙調査を実施し、参加者自身への影響を検証した。

４．研究成果

（研究 1）帆掛けサバニに関する史的資料を収集するとともに、帆かけサバニ復興運動に関わる組織（帆かけサバニ保存会，サバニレース実行委員会等）およびサバニ研究者や船大工、サバニ愛好者などの重要な人物を対象として聞き取り調査を実施した。海洋文化のなかでも伝統的な文化と捉えることができる木造船のひとつ、沖縄地方で用いられてきた民族的な小船である“サバニ”が、現在においてレジャーボートとして利活用されている事例に注目し、サバニに関する歴史的な経緯、活用の契機となったサバニ帆漕レースの開催に至る展開と現状について述べた。板井の調査によると、1940 年代からサバニは動力化されるようになり、かつ大型化した。エンジンという重量物を載せるために浮力を確保しようとして様々な改造が行われるようになった結果、もとの船型からはかけ離れた不自然な船型を持つサバニが現れたが、効率の悪い船体のサバニは 1970 年代末ごろから建造されなくなり、より効率の良い FRP（Fiber Reinforced Plastics：繊維強化プラスチック）製漁船に代替されていき、数を減らしていったと記載されている。1967 年の沖縄タイムス（新聞記事「この道この人」　1967 年 7 月 13 日）においては、当

時の沖縄にくり舟が 2550 艘あることが記載されるとともに、ガソリンエンジンの後に重たいディーゼルエンジンが登場し、これに耐えうる改造型のくり船を糸満船大工の大城松助氏があみ出したことが掲載されている。また同新聞記事には、くり船づくりが次第に姿を消しつつあり、「後継者がなかなかなく、くり舟づくりは次第に姿を消しています。漁船の大型化でむかしみたいにくり舟が重視されなくなったことも事実でしょうが、やはり、後継者は残しておきたい」といった大城松助氏の語りも記載されている。沖縄県糸満市役所が保存している 1971 年 12 月 31 日における漁船台帳を参照したところ、5 トン未満の漁船について、船体の長さと幅の比からみて、ほぼサバニとみられる 262 艘をカウントできるが、無動力のものは 2 艘のみであった。東京大学工学部船舶工学科の竹鼻三雄（1970 年代中頃のものと思われる文献：発行年不明，船大工大城清氏所蔵）は、「調査・サバニ考」において、木造のサバニ製作について紹介するとともに、サバニを芸術品に近いと記し、製作技術について無形文化財ともいえると述べている。そして、サバニがエンジンを装備し遠洋に出るようになると、その中に居住するいわゆる家船（エブネ）の機能が必要となり、船幅が広くなったと記述している。サバニの船型は時代とともに変化し、FRP 化が図られていると記載されている。藤原(1975)による日本民俗学会の発表原稿の中でも「八重山のサバニ」についての記述が認められる。当時のサバニにはディーゼルエンジンが搭載されているが、もともとは帆走したと記載されている。1970 年代における船大工の減少については、玉城（1976）も「若い船大工は少ないようだ」と記録している。先に述べた、糸満船大工の大城松助氏の後継ぎが大城清（おおしろきよし）氏（2023 年現在においても現役船大工として活躍している）であり、（サバニに関連した書籍や原稿を残している）織本憲資氏が依頼して、幻の古式サバニと紹介されている“おもろ（船名）”を作成したことが記録されている。織本は、沖縄海洋博覧会が開催された 1975 年に雑誌「旅」に「黒潮が育てた糸満の刳り船」を掲載している。この中でサバニについて「世界で最も美しい舟」と記述し、糸満在住のサバニ大工である大城清氏に古式サバニの造船を依頼することとなった経緯を記載している。織本は古式サバニ復元ののち、復元するだけにとどまらず、糸満から本土へ渡航する実験計画を考案したことが記事や書籍に残されていることから、実際の帆漕が行われることに繋がったと考えられた。続く 1976 年に織本は、ヨット雑誌 KAZI に「沖縄に古式サバニを訪ねて」という文書を残している。古式サバニを復元して、サバニにて実験航海を行い、奄美大島と屋久島の間の黒潮を乗り切って、日本人南方渡来説や黒潮文化圏存在説を解明する一端にしたいと考えていた。そのためのトレーニングが行われ、糸満の長老漁夫・玉城亀三さんが教師を務めたと記載されている。それを示す証拠として、当時、サバニを制作した大城清さんと玉城亀三さんがサバニ「おもろ」に乗ってトレーニングしている写真を大城清氏が所蔵していた。このような計画と実験（トレーニング）が琉球新報を通じて日本海事広報協会に知られ、「黒潮文化展」に“おもろ”が出品されることとなった。そして、舵社を通じて横山晃氏にサバニの調査解析を依頼することになった。織本の古式サバニの復元については、舵社が 1983 年に発刊した書籍『日本土人南島探訪記』のなか、幻の古式サバニにて詳しく記載されている。書籍の中では、古式サバニがテレビに出演したことも記載されている。また織本は、古式サバニの船型についての造船工学的根拠を求めて、ヨットデザインの匠である横山晃氏に書簡を送り、船体の解析を依頼したことが記録されている。その後、横山はヨット愛好者のための雑誌「KAZI」の中でサバニの船体について 3 回にわたって分析結果を掲載するとともに、書籍「ヨットの設計にも分析結果を記載している。このことにより、ヨット愛好者にサバニの存在が広く知られることに繋がったと考えられる。この後、船舶工学の研究者らが沖縄サバニの船体抵抗等に関する研究論文を著して、サバニが優れた性能を有する舟であることを示している。白石（1985）は著書「沖縄の舟　サバニ」を著し、サバニの構造、製作、操縦、用具といった視点からサバニについて記述し、「亡びゆく伝統的な舟づくりを後世に伝えることができれば」と記述している。沖縄・糸満のサバニ大工、大城正喜については、塩野（1994 年聞き取り・2011 年発刊）が聞き取り調査を行い、書籍のなかに語りが残っている。大城正喜は 40 年以上にわたり、糸満でサバニを造っていた船大工である。書籍「手業に学べ 技：糸満・沖縄のサバニ大工」の中の記述によると、当時、木造船のサバニの注文はほとんどなく、ハーレーブニとか祭用が主であり、FRP の船が増えたとされ、船大工の技術について「ずっとこの技が残ればいいですが」との語りが記録されている。

　また、千足らによる船大工を対象とした聞き取り調査によると、実際に木造の帆掛けサバニ（おもろ）が帆走した事実を、当時のラジオが放送したとされ、沖縄のヨット愛好者がそれを聞き、帆掛けサバニに興味を示していたことが把握できた。

　サバニ帆漕レースは、2000 年の九州・沖縄サミットを記念して開催（開始）された。当該レースは、「古来より受け継がれてきたサバニによる操船技術の復活、帆走の再現を目指し、次の世代へと伝えていく」という思いを具現化しようとしたものであり、サバニの伝統を復興させる海洋文化復興運動の一つとして位置づけられる。2019 年時点で 20 回継続して開催されているスポーツイベントでもあり、毎年梅雨明けの 6 月末から 7 月初めの時期に、沖縄県の慶良間諸島の一つである座間味島の古座間味ビーチから那覇港までの約 20 海里（約 37㎞）を渡るレースが開催されている。また、大会名にある「帆漕」という言葉は、帆走（船に帆を張り風の力で走ること）の「走」を「漕」に変えた、この大会から生まれた造語であると述べられており、帆を操りながらエークを使って船を漕ぐという、古来より伝わるサバニ操船技術の再現・継承への想いが込められていると記載されている。レースが開始される直前の頃、サバニは、エンジンを船体に搭載することで、帆を使用することがほとんどなくなっていき、船体も大型化して FRP 材が使用され

るようになっていた。現サバニレース実行委員会の委員らは、沖縄県の与那国島で使用されていたサバニに乗りカジキ漁を取材した際に、サバニが帆で走ることをウミンチュ（漁師）から教わった経験を持ち、同時に、海外ではクラシックヨットなどの古いものを大切にする文化を目にしていた。一方、沖縄県中城市の馬天港で大城清氏らがサバニに帆をかけて海に出ていたことを目にした沖縄在住のヨット関係者（愛好者）が帆掛けサバニに興味を持ち、その後に沖縄のヨット関係者の中で帆掛けサバニ復興を企画していたことが把握できた。沖縄の伝統的な木造の小舟に帆を掛けた、沖縄海洋文化の象徴である帆掛けサバニに着目した現レース実行委員会委員は、その後に沖縄のヨット関係者をはじめとする重要な人物たちに帆掛けサバニ復興について相談をしたことなどがこの復興運動（サバニ帆漕レース）の契機となっていたことが把握できた。レース実施場所については、琉球王朝時代の歴史的な航路でもある那覇と中国への進貢船が立ち寄っていた座間味島との間の海域が、レース実施予定時期の梅雨明け頃の風向き等からも適しているため、当時の座間味村議員や村長に相談し、レースのスタート地点を決定したとのことであった。サバニレース実行委員会委員らは、サバニ帆漕レース開催のためのスポンサー（当初はOMEGA、現在はアビームコンサルティング株式会社、等）を募り、沖縄のヨット関係者が中心となり人（レース参加者およびレース運営等の支援者）を集め、スタート地点の座間味村関係者やゴール地点の那覇港関係者らの理解も得てレースの開催に至ったことが把握できた。

（研究 2）帆掛けサバニへの取り組みが地域社会へ与えた影響を抽出するために、サバニレース参加者を対象とした調査を実施した。本研究では、「サバニ帆漕レースやサバニへの取り組みが、参加者自身やチーム・地域社会に与えた影響」について明らかにすることを目的として、サバニ帆漕レースに参加経験のある者を対象とした web 調査によって得られたテクストデータを SCAT により分析した。レースが実施される座間味島の在住者、沖縄県内在住者、沖縄県外在住者のように在住地域によって分類して分析を行った。座間味島在住の参加者のデータにおいては【島での熱心な取り組み】が示された。実際に、第 20 回大会の参加チームをカウントすると、座間味村内から 9 艇（全参加艇数 36 艇中）で全体の 25%を占めていた。また、【座間味島の中学生への影響】に示される、中学生による“海学校”の取り組みが、村内に影響を及ぼしていると考えられる。座間味島における地域住民と中学生による“海学校”への取り組み事例も地域と学校との連携、地域のアイデンティティの高まり、連帯意識の高揚、世代間交流の活性化といった意義や機能を示すことが出来ると考えられた。開催から第 20 回を迎えたサバニ帆漕レースには、“海学校”の卒業生から構成される“元海学校”チームがレースに参加するようにもなってきている事実がこれらの考察を裏付けるとも考えられる。また、座間味村は座間味島にサバニを保管しておくための艇庫（海洋体験施設）を 2005 年に建設し、村をあげてサバニ帆漕レースを継続するための努力を行ってきている。このことも【座間味島が続けたことによる波及効果】につながったと考えられる。座間味島以外の沖縄県内在住者の回答からは、【レース開催による認知度の高まり】と、「20 年継続したレースの貢献度が高い」といった【レース運営者への感謝】に関する記述、「サバニとサバニの修理整備が身近なもの」となる【日常行動への繋がり】に関する記述に加えて、「地域の小学校、中学校、沖縄水産高校と授業の一環として地域文化に海洋教育として教育行政も目を向けてくれるようになりました」など【他地域への波及効果】や、「沖縄の伝統サバニを乗りこなす塾をやっている」など【レース以外の活用の可能性】が記述されていることが特徴である。沖縄県内では八重山地域や糸満市に波及効果が高いことがうかがえる。実際に、糸満では船大工自身がレースに出場し、サバニを作り続けている事実があり、弟子への造船技術の伝承が認められている。また、糸満はサバニの保管場所としての一大拠点ともなっており、複数のチームがサバニを置き、練習や行事を行うなど、活動がますます盛んになってきている。また、2015 年には糸満帆掛けサバニ振興会が立ち上げられ、様々な勉強会を企画・開催し、糸満市の教育活動の受け皿となったり、さらには 2019 年にはサバニで糸満から久米島までを帆漕したりするなど、その実践を拡大させている。沖縄県外在住者においては、【他地域の人が沖縄県人と交流する】、【他地域の人が沖縄の文化に触れる】ことにより【沖縄についての理解の拡大】につながっていることが示唆された。また、サバニの【伝統を継承したい】といった思いをはじめとした【個人の思いへの影響】が、他の地域の対象者よりも多く記述されるとともに、【サバニに取り組めることへの感謝】が表現され、サバニへの取り組みが【人生に豊かさをもたらす】ことが述べられた。以上のように、サバニ帆漕レースについての経済的な影響や知名度の向上などにも言及があったが、【人との繋がりの拡大】において大きな影響を与えていることが推察された。座間味島がその場となり【継続による波及効果】が生じ、帆掛けサバニに乗る行動や帆掛けサバニを活用することによって、帆漕技術が復興・伝承されることにも繋がっている。多くの木造船は、博物館で展示されるものとなっている今日、帆掛けサバニという伝統的な海洋文化財を、地域の自然や歴史を背景とした地域づくりに有用な資源として活用している事例として位置づけることが可能であり、取り組む人々やコミュニティに様々な影響を及ぼしていることが示された。また、帆掛けサバニが活用されることによって造船技術や操船技術の伝承などが示されるなどの現代的な意義を認めることが出来ると考えられた。全ての地域からの回答に共通して記述されていたのは、【人との繋がりの拡大】、【レースへの挑戦がもたらす心理的効果】、【継続による波及効果】である。座間味島在住の参加者のデータにおいては、【島での熱心な取り組み】と【座間味島の中学生への影響】が特筆できる。沖縄県内在住者からは、【レース開催による認知度の高まり】、【レース運営者への感謝】、【日常行動への繋がり】に加えて、【他地域

への波及効果】や【レース以外の活用の可能性】が記述された。沖縄県外在住者においては、【沖縄についての理解の拡大】や、他の地域在住の対象者よりも、サバニの【伝統を継承したい】といった思いをはじめとした【個人の思いへの影響】、【サバニに取り組めることへの感謝】が表現され、サバニへの取り組みが【人生に豊かさをもたらす】と記述された。

以上のように示されたサバニ帆漕レースの開催と継続を契機とした帆掛けサバニへの取り組み事例から、取り組む者や居住地域への様々な影響について考察することが可能であった。帆掛けサバニという伝統的な海洋文化財を、地域の自然や歴史を背景とした地域づくりに有用な資源として活用している事例として位置づけることが可能であり、取り組む人々やコミュニティに様々な影響を及ぼしていることが示された。また、帆掛けサバニが活用されることによって造船技術や操船技術の伝承などが示されるなどの現代的な意義を認めることが出来ると考えられた。

（研究 3）

シリアス・レジャー実践者において同じ専門志向を有する仲間がそれほど多くないが、回答者はマイノリティでありながら継続的にサバニ帆漕レースに参加している傾向があった。レースへの参加を決めた理由にも挙げられているとおり、座間味島–那覇間の慶良間海峡を横断するコース設定において、景観の素晴らしさおよび決して容易ではない海峡横断の難しさも含めた＜自然環境の魅力＞があることが指摘できる。また、そのコース設定には＜冒険的要素＞が多く含まれており、参加者にとっては困難な状況を乗り越えてゴールした＜達成感＞に繋がっていることが考えられた。サバニ帆漕レースには、海況の変化を瞬時に捉えて対応し、船の特性を十分に理解したうえでサバニをコントロールできるといった操船経験が要求され、各クルーが役割を理解しチーム一丸となりゴールを目指すといったチームとしてのキャリアも求められる他のシリアス・レジャーとは異なる特徴が認められた。このことから参加者は沖縄県内・県外の居住地に関係なく複数回のレース参加経験があり、20 回開催されてきたレースのなかで経験を積み重ねていることが明らかとなった。また、沖縄県外居住者にとっては、自然の豊かさや魅力を感じられるコース設定であることが魅力となっていた。シリアス・レジャーの特徴として専門志向を持つ仲間が近くにいないマイノリティが挙げられるが、サバニレース参加者はサバニ保管場所を拠点として、チームの垣根を越えて練習をするといった環境を整えていた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 千足　耕一・蓬郷　尚代	４．巻 33(4)
２．論文標題 帆掛けサバニの現代的な意義に関する事例研究 －サバニ帆漕レース参加者に対する調査の質的分析－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 沿岸域学会誌	６．最初と最後の頁 51-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 千足耕一	４．巻 72(11)
２．論文標題 木造の新造船　帆掛けサバニ（糸満ハギ）の制作過程	５．発行年 2020年
３．雑誌名 海員	６．最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蓬郷尚代	４．巻 57号
２．論文標題 シリアス・レジャーの特徴を持つ海洋スポーツイベントに関する研究－慶良間海峡横断サバニ帆漕レースの参加者を対象にした調査－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 体育研究	６．最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 千足耕一，蓬郷尚代
２．発表標題 伝統的な木造帆掛けサバニの継承に関する史的研究－サバニ帆漕レース開催までの期間に着目して－
３．学会等名 日本野外教育学会第24回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 蓬郷尚代，千足耕一
２．発表標題 スポーツイベントが海洋文化伝承に与える影響－サバニ帆漕レース参加者を対象とした質的分析－
３．学会等名 日本野外教育学会第24回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 千足耕一，蓬郷尚代，中原尚知
２．発表標題 糸満市における船大工を対象とした聞き取り調査
３．学会等名 日本海洋人間学会第9回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 蓬郷尚代，中原尚知，千足耕一
２．発表標題 サバニ帆漕レース参加者を対象としたイベントの満足度に関する研究
３．学会等名 日本海洋人間学会第9回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 千足耕一,蓬郷尚代
２．発表標題 帆掛けサバニの現代的意義に関する研究
３．学会等名 日本野外教育学会第23回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 蓬郷尚代，中原尚知，千足耕一
２．発表標題 海洋スポーツイベントと海洋文化復興－サバニ帆漕レースを例に－
３．学会等名 日本海洋人間学会第8回大会，2019年9月22日（東京）
４．発表年 2019年

１．発表者名 蓬郷尚代,中原尚知，千足耕一
２．発表標題 船大工の技術の伝承-サバニ帆漕レースが文化復興に与えた影響-
３．学会等名 日本沿岸域学会研究討論会第30回大会，2019年7月19日（大阪）
４．発表年 2019年

１．発表者名 千足耕一,蓬郷尚代
２．発表標題 サバニによる海洋文化復興運動に関する調査研究
３．学会等名 日本野外教育学会第22回大会，第22回大会，2019年6月23日（宮城）
４．発表年 2019年

１．発表者名 蓬郷尚代・千足耕一
２．発表標題 サバニ復興運動としてのサバニレースの背景と経緯
３．学会等名 日本海洋人間学会第7回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 千足耕一,蓬郷尚代
２．発表標題 木造帆掛けサバニの帆漕実践
３．学会等名 日本海洋人間学会第11回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 千足耕一,蓬郷尚代
２．発表標題 木造帆掛けサバニの継承と利活用に関する史的考察
３．学会等名 日本沿岸域学会研究討論会令和4年度全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 千足耕一
２．発表標題 伝統的海洋文化の継承と活性化－沖縄地方の帆掛けサバニに関する事例研究－
３．学会等名 第6回東北アジア海域と人文ネットワーク国際学術大会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計1件

１．著者名 千足耕一,蓬郷尚代	４．発行年 2023年
２．出版社 公益財団法人笹川平和財団	５．総ページ数 23
３．書名 海洋文化を活用した海洋レジャーの展開と管理－帆掛けサバニを事例として－（第5章）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

海洋文化復興運動が地域社会と地域経済に及ぼす影響　科学研究費基盤C一般：18K10922
https://chiashi.jp/?page_id=1883
海洋文化復興運動が地域社会と地域経済に及ぼす影響　科学研究費基盤C一般：18K10922
https://chiashi.jp/?page_id=1883
科研費のページ
http://chiashi.jp/?page_id=1883
科研費のページ　海洋文化復興運動が地域社会と地域経済に及ぼす影響
http://chiashi.jp/?page_id=1883

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中原　尚知 (NAKAHARA Naotomo) (90399098)	東京海洋大学・学術研究院・教授 (12614)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関